

國學院大學

院友学芸員

2010 NO.3



國學院大學博物館学研究室

発刊の辞

國學院大學文学部教授 博士（歴史学）

青木 豊

81期史



本誌も第3号を発刊することが出来ました。一般に有りがちな3号雑誌で終わらぬよう肝に銘じているところであります。

昭和33年の開講以来53年を迎えた博物館学講座にとって正に変革の年でありました。

先ずは、理事長、学長、副学長をはじめとする大学当局の格別の御配慮により、平成9年度から考古学コースに付随する形で設けられて居りました大学院での博物館学が、昨年10月1日より國學院大學文学研究科史学専攻博物館学コースとして、新設された事であります。

次いでは、新コース設置に伴い博物館学講座の開講以来の悲願であり、前任の加藤有次先生の夢でもありました専任教員の増員が、大学首脳部の御理解により果たし得た事であります。具体的には准教授一名が新たに任用されました。

また、大学当局の御配慮により、従来の学部 of 博物館学実習室とは別に、大学院専用の「博物館学専門実習室」を開室することが出来ました。

更には、平成21年度大学院教育改革推進プログラムに、「高度博物館学教育プログラム」が採択された事であります。この採択に伴ない、國學院大學研究開発推進機構内に「博物館学教育研究情報センター」を開設し、助教一名が配置された事であります。当該プログラムの概要については末頁の概念図の通りであります。特徴的な点は、博士課程前期修了者には國學院大學独自資格である「國學院大學ミュージアム・アドミニストレーター」、博士課程後期修了者には「國學院大學ミュージアム・キュレーター」の授与を決定したことであります。両授与資格の目的は、確認するまでもなく高度博物館学教育修了者であることの明確化であります。今後、当該資格が社会的に高評価される事を願うものであります。

当該本学独自資格とは別に、従来通り博士課程後期を修了し、論文審査を経た者には博士（歴史学）が授与されます。今年度は、論文題目は「野外博物館成立史の研究」で一名の課程博士を出すことが出来ました。これで本学に於ける博物館学での課程博士は2名、論文博士は3名となりました。また、博士課程前期修了者、修士（歴史学）は7名でありました。

学部では、150余名の有資格者を送り出すことが出来ましたが、学芸員としての就職は厳しいのが現状であります。何卒、院友学芸員諸氏におかれましては、後輩の就職に関しましても御指導、御助力の程お願い申し上げます。

平成22年3月20日

「特別展を考える」

東京国立博物館事業企画課長

井上 洋一 (いのうえ よういち)

87期史・90博前史・93博後史



1974年、ルーヴル美術館から世界的名画と評されるレオナルド・ダ・ヴィンチの《モナ・リザ》が東京国立博物館（以後、東博）にやってきた。千載一遇のチャンスとばかり、友人とともに東博にはしった。高校3年の春、これが私の東博デビューである。そこはまさに人の渦だった。相当待たされたあげく、作品の前に立つことができたのはわずか3分程度。それも作品には近付けず。にもかかわらず、そこには「これが『本物』の《モナ・リザ》か!」とただ単に「本物」に出会ったことにのみ喜びを感じる無邪気な自分がいた。そして、会場には「立ち止まらないでください!」という警備員の声がひたすら響いていたことを記憶している。あれから30余年、まさか自分自身が、同じ会場で東博の研究者としてレオナルド・ダ・ヴィンチを扱うことになるとうとは…。

2007年春、イタリア政府からの要請を受け、NHK、NHK プロモーション、朝日新聞社とともに「レオナルド・ダ・ヴィンチ—天才の実像」という特別展を東博で開催した。私は博物館側のチーフとしてこの展覧会に参画した。そこにあの《受胎告知》の「本物」があった。しかし、この世界の至宝を東博に展示するまでには紆余曲折があった。まず、直面したのが、この作品を日本に出すことへの反対運動だった。それも作品の所蔵者であるウフィッツィ美術館の館長自らがその旗頭となっていたのである。ショックだった。彼は公然と新聞や雑誌に、その「暴挙」の中止を訴えていた。しかし、彼は真剣に作品の保護・保全を考えていたのだ。その姿は学芸員としてきわめて凛々しくも映っていた。やがてその運動は市民をも巻き込み、ある種の社会問題ともなった。こんな状況で本当にこの展覧会はできるのだろうか。幾度となく、こんな疑問が頭を過ぎった。当方からすれば、これはイタリア政府からの要請を受けて行われるもの。話が違う。二転三転しながら結局、レオナルドが両国間の「文化親善大使」となり、「文化外交」の名のもとに、高度な政治判断によって決行された。その時、イタリア国営放送からインタビューを受けた。「イタリア国内でこの展覧会に対し、反対運動が起こっていることをご存知ですか」「イタリア国民に対して一言」。

あまりに無神経な質問に戸惑いながらも、「もちろん存じております。しかし、私たちはこれまでに作品の安全のために考えられるだけのことを考え、やるべきことはすべて行ってきました。それも日本のスタッフだけではなく、イタリアのスタッフとともに。保管には万全を期します。だからこそ私たちが信じてください。そしてこの展覧会が無事終了することを私たちと一緒に神に祈ってください。」と答えた。結果は796,004人という膨大の数の来館者で賑わい、そして、作品は無事、元の壁に掛けられた。しかし、この瞬間を迎えるまでは、心静かに眠ることさえできなかった。学芸員の宿命である。

一方、入場者数でその展覧会の良し悪しが評価されることへの疑問がさらに拡大したことも事実である。80万に迫る入場者。この数からすれば展覧会は大成功である。しかし、会場は常に混み合い、待ち時間も1時間を越えた。そして、そこにも遠い昔に聞いたあの言葉が響いていた。「立ち止まらないでください!」

自戒の念を込めて敢えて言いたい。興行化する昨今の特別展。作品が十分見られなくても数が入れば成功とみる風潮。これでいいはずはない。博物館は単に「本物」に出会える場ではない。私たちは、来館者に対し、真に作品と向かい合い、その持つ魅力を発見し、静かにモノと対話のできる、そんな環境を提供すべきである。しかし、日本の場合、この実現にはスポンサーである新聞社ならびにテレビ局等の特別展共催者の理解が必要不可欠となる。わが国の特別展の歴史を見ると、これまでマスコミ各社がいわば国に代わり国内外のさまざまな文物の紹介に努めてきた経緯がある。これは現在でも続く日本の特殊事情である。しかし、悪化する経済状況の中では、日本の文化事業を経済的にも支えてきた彼らとて特別展での赤字は許されないという。それ故、入場者数に拘り、結果として会場には鮫詰めの状態が生まれる。こうした悪循環を何とか是正したい。ここは肥大化した特別展の数の削減や規模の縮小化を図るとともに経費のあり方を真剣に考えるべきではないか。その上で充実した企画と作品の質に拘った特別展を計画すべきではないだろうか。

博物館と埋文センター

富山県埋蔵文化財センター（登録博物館）所長

関 清（せき きよし）

81期史



昭和30年から18年間続いた高度経済成長期には、無秩序な開発の前に多くの貴重な遺跡を失うこととなった。その後、文化財保護法が改正され保護の強化が図られるものの「日本列島改造論」の中で、各種開発事業に係る埋蔵文化財調査の需要が急激に高まった。同時にこれらに対処するために整備された施策の一つが、埋蔵文化財センターの建設であった。当センターもこのような流れの中で、昭和51年度に建設されたものである。

ところで、当センターは平成5年に登録博物館となり、歴史博物館として運営している。発掘調査も実施しているものの、ごく僅かであり当初の設立趣旨を大きく変えてしまったのである。この背景には、埋蔵文化財に対する県民の理解を得る必要があったこと、平成元年に財団法人組織の中に発掘調査部門を設置したこと、そして財源不足から総合博物館の建設を断念したことが挙げられる。困みに、当センターでは、年4回の企画展示、各種講座・教室そして体験学習などを実施しており、それなりに博物館としての機能は果たしていると思う。

潜む課題

埋蔵文化財センターが博物館活動を行うことは、意義が無いとは思わないし、誠に結構、大いにやるべしとも考えている。しかし、大きな落とし穴があることを見逃してはならない。それは、埋蔵文化財センターが保有する膨大な資料は、旧石器時代から近代まで及ぶ考古資料であり、文献資料や民俗資料などは、殆ど展示されないという現状がある。郷土の社会や風土を作り出した真の背景を知るためには、文献資料や民俗資料も欠かせないものである。我々の営みを過去に学び、将来を展望するきっかけを学べる場とするためにも、総合的に探求できる博物館の必要性を希求していく必要がある。

意義ある無駄

現在、政府では無駄を排除するとして「事業仕分け」を行い、連日マスコミを賑わせている。地方自治体でも行財政改革がお題目のように飛び交い、「費用対効果」や「予算節減」が声高に叫ばれている。このような中、博物館や美術館は極めて居心地の悪い空気を感じているのは私だけでは無いと思

う。確かに博物館が無くとも人は生きられるし、全ての国民が博物館の存在を望んでいないことも理解できる。しかし、人間は衣・食・住が足りて幸せを実感できるものではない。効率主義を全く否定する訳ではないが、「無駄」の無い社会はいつの世にも、どの世界にも存在しないと思う。私の座右の書に森政弘氏の「非まじめのすすめ」がある。哲学でいうところの「止揚」を説いているものであるが、現在言われている「無駄」の中にはこの「止揚」を含んでいると考えている。「浪費」と「無駄」とは意味が異なる。

まもなく引退を迎える年になったためか、つい本音がこぼれてしまったようである。これからの学芸員は、博物館の必要性を叫んでいくべきだと思う。埋蔵文化財センターが博物館と言っているようでは問題外である。

かつて樋口先生には「考古学者はどこでも歩け」と言われた。また、加藤先生のうどんの話が強烈に残っている。今になって思うことは、それらが私の道標になっていることに気が付く。すばらしい「無駄」を教えて頂いたことに感謝している。



県民考古学講座



体験学習（勾玉づくり）

内なる鹿児島を探る民俗の旅

—地域博物館学芸員生態記—

鹿児島県歴史資料センター黎明館学芸課長

川野 和 昭 (かわの かずあき)

81期文



「おばさん、私は焼畑のことをずっと聞いてきたのに、何故このタカヤボ（竹の焼畑）のことを教えてくれなかったの」。「あんたが聞かなかったからよ」。

昭和63年8月、筆者は川辺川ダム建設に伴う熊本県五木村の民俗調査団の一員として、焼畑の技術を中心に聞き書きを進めていた。同村の下梶原の作り小屋への道中の森は、樅や檜などの木々とマダケとが混じっている焼畑跡地の再生過程にある森であった。しかも、標高800mを越える場所には似つかわしくない竹の群生で、強烈な違和感を感じたのである。その違和感を同村出る羽に住む白石スギ嬢にぶつけてみると、「それはタカヤボよ」と答え、よく燃えること、表土が流れないこと、アラシ（山に戻した焼畑跡地）にすると立派な竹の子が採れること、お茶が採れること、10年も経てば再び焼畑にできるほど森がよみがえること、だから木だけの森の焼畑よりずっと良いことなどを語ってくれたのである。聞き書きを終えた後のやり取りが冒頭の会話である。それは「焼畑は木の森を薙いで焼くもの」というこれまでの常識が大きく崩れていく瞬間であった。

以後、「竹の焼畑」を求めて、北は五家荘、宮崎県椎葉村や米良谷、高知県仁淀川や四万十川の上流域などへ、南は、大隅半島、三島、トカラの島々と調査域を拡大していったのである。その結果、「竹の焼畑」を基盤にした生業は、「竹林文化」とでも呼びうる文化的全体性を持つのであることが臆気ながら掴めるようになってきた。かつて大和朝廷に服属させられた隼人は、最も得意とする竹細工の技術をもって天皇に奉仕するという屈辱を与えられた。それが、古来南九州の日本列島における文化的位置だったのではないか。

そうした調査の続行と共に、平成7年2月に「黎明館企画特別展 鹿児島竹の世界—環シナ海文化の

視座から—」を担当した。列島の中では特殊と思われる鹿児島モノは、東南アジアの少数民族のモノと比較すると、形態的にも製作技術的にも微細な一致を見せた。

そして、展示が県議会の本会議場で褒められたご褒美（或いはガス抜き）として、翌年3月ラオスへの調査の機会を与えられる。南九州で蓄えた「竹の焼畑」という視点が基本となったことは言うまでもない。「竹の焼畑」や「竹の生活道具」はもちろん衣、食、住など生活の基盤になるレベルで、南九州との深い繋がりを示すものであった。大きな衝撃であった。それ以降、延べ14回にわたるラオス調査と資料収集を繰り返しながら、南九州とラオスとを比較する大小の展示会を、飽きることなく繰り返している。それは正しく「内なる鹿児島を探る民俗の旅」であり、「地域（鹿児島及びその周辺の南九州）の文化の根っこを掘る」、面白くて止められない作業である。「日本列島のローカルは、アジアのグローバル」と呟きながら、県民の自己認識が「鹿児島（の文化）は国境を越えて東南アジアの少数民族（の文化）につながる」となる日を遙か遠くに見ながら、日常を這いずり回っている。地域博物館の学芸員の果たすべき役割は決して小さくないのである。



ラオス・ボンサリー県カナ村（ラオ族）での調査（左端）
2004、12、16

将来像をつくる学芸員に

板橋区立郷土資料館 館長

小西 雅徳（こにし まさのり）

88期史



2009年11月中旬に7年ぶりにニューヨークを訪問し、当地の博物館事情を観察してきた。今回は館内部まで立ち入っての情報収集でなかったが、日本とアメリカ、ニューヨークの大規模館のスタンスを比較する上で大いに参考にしたいと多少意気込んでいた。しかし、現実には彼我との圧倒的な組織力の違いを思い知った次第である。私は以前にも、欧米の博物館状況を見て色々な面で大きな影響を受けつつ、それを勤務先の博物館運営に援用しようと熱意に燃えていた時期もあったが、ここ10年ほどの間に現実と理想の埋らぬギャップに苛まれてきた。

さて、今回のニューヨーク訪問の目的は、メトロポリタン美術館（MET）で開催中のサムライ・アート展を視察、担当の小川盛弘氏（日本武器武具部門顧問兼エディター）に案内をお願いし、情報交換することにあった。この企画自体は10年程前から構想していたが諸般の事情で延期され、今回、文化庁等の支援を受けて小川氏が3年奔走して開催にこぎつけたという。日本の国宝・重文級の刀剣・甲冑具足を多数出品する、近年まれに見る大規模展であるが、残念ながら国内開催がない。

開館1時間前の8時半に関係者入館の手続きを行い、監視員しかいない広い館内をゆっくり鑑賞、堪能させていただいた。展示物に合わせたケース造作や入念な資料の固定が行き届き、周到な準備の上でのディスプレイに感心した。これは設営最中の直前でないとは出来ない細工と思われたので聞いてみると、これは全て館内で制作しスタッフが設営するからだと言合点した次第である。METにはそうした小回りのきく部門が機能しているのであり、今日の日本の多くの博物館が忘れていた、美術梱包・展示設営専門業者一任だけではできない組織の存在をそこに見たのである。METのような大規模館だから出来るというより、組織機能と役割とを充分踏まえた土台があると率直に感じたものである。

閑話休題。私が板橋区教育委員会に奉職したのは、国学院の助手を経た昭和60年のことである。30歳近い年齢であった。当時は埋蔵文化財・文化財保護・郷土資料館の3役を兼ねる小規模な組織・施設であったが、平成2年正月に新規施設と組織とを得て、早いもので20年を経ようとしている。その間色々な性格の事務系館長に仕え、今は自身で館長のポストを得た。隣の美術館長共々学芸職の館長であるが、都区内では極めて少ない存在である。行政組織が大きい中で専門職がしかるべくポストに就くのは、事務職がなるのとは違う要素を求められると

聞く。過程がどうであれ、学芸員として将来の館存在を左右する将来像を強く示す必要があるとするなら、それなりのポジションを得る必然性があるかもしれない。

私は板橋で比較的好きな事をさせていただいた。それには事務方が協力的であったこともあるが、また同時に多くの理解ある館長にも支えられたからである。事務方は押しなべて学芸員が動きやすい環境を作ることに協力的であったし、多少の予算の融通にも動いてくれた。これに対し学芸員も応えなくてはならない。確かに、博物館は区民（市民）に対してどう存在するかという基本的な理念があり、この視点はおかしくもあるが、内面的な事ながら、事務・学芸が車の両輪のごとくかみ合わない、その余波が自然に展示や教育普及など館運営に微妙な影として映るものである。館内部の実状を、空気のように区民・観客は敏感に感じるものである。学芸員という、同一職場に長く居る立場として、このような機微への察知を同時に求められると思う。更にもっと重要な事は、館の将来像を打ち立てるのは学芸員しかいないということである。

次ぎに感謝の言葉を込めて一言申したい。私が板橋の博物館という職場を得たことは、運命であったと思っている。縁である。北海道釧路に生まれ、国学院出身の考古学者で釧路市立博物館長ともなった、故澤四郎先生に国学院を進められ、卒業後は釧路に戻る予定でいた。それが、博物館研究室の故加藤有次先生を訪ねたらたまたま不在で、隣室の考古学資料館にいたのが金子・青木の両先生であった。青木豊先生との出会いが私の運命を変えたのだと思う。神奈川県内の遺跡を中心に発掘調査に参加し、骨董趣味に感化した。樋口清之先生と直に接した最後の世代で、樋口先生のオーラが考古学・博物館の世界で回っていたのが昭和50年代前半の国学院であった。やがて樋口先生の後任に文化庁から小林達雄先生が来て、新たな縄文観を打ち立てた。私たちは良き師と環境に恵まれた時代に育ったのかもしれない。

最後に私が後輩に望むとしたら、常に本物へのこだわり、実資料を手元にとって観察する目を養ってほしいと思っている。理論も重要だが、一にも二にも実物を見ることの大切さを身に付けて欲しい。活字化したモノから学ぶだけでは、本当の意味の学芸員になる事はできない。本物を扱う技・業に長けた者には、自ずと博物館世界への道が開けてくると私は思っている。



梅まつりの武者行列記念写真



メトロポリタン美術館における児童向けレクチャー

地方博物館の現状と評価基準

御坊市歴史民俗資料館 館長

中村 貞史（なかむら ただし）

75期史・77期博前文



平成17年に和歌山県立紀伊風土記の丘の館長を最後に34年間の学芸員生活に幕を下ろしたつもりでしたが、御縁があって、翌年から御坊市歴史民俗資料館でお世話になっています。

御坊市歴史民俗資料館は、昭和62年（1988）に御坊市立の施設として設立されましたが、市の財政状況の悪化にともない平成18年（2006）度からは特定非営利活動法人スサノヲが指定管理者となっており、県内ではじめて指定管理者制度に移行した博物館です。

御坊市歴史民俗資料館と同様、バブル期に市や町が建設した博物館施設は、設置主体である市町村の財政状況の悪化により合理化という嵐の中にあります。さらに平成21年9月のリーマンショックによる世界的な不況が追い打ちをかけてたいへん厳しい状況に置かれています。これらの博物館は、その地域の文化財保護及び啓蒙・学校教育との連携・観光などの面で一定の役割を果たしてきました。もともと学芸員が配置されていない館が多く、経費の大幅な削減、職員の減少等により、博物館活動に支障をきたしており、いずれ閉館や廃館となるところが出てきても不思議はない状況にあります。

さて、最近、博物館事業の合理化という動きにともない博物館活動に対する評価が云々されています。いままでは、博物館の研究機関としての機能が特に強調されていたことから、聖域化されていてあまり評価をされてきませんでした。ところが、博物館活動は地域社会と密接な関係を保ちながら行われるものだと考えられるようになり、博物館の教育・普及活動が脚光を浴びるようになってきています。そのため、研究機関として聖域がなくなり、評価が取り入れら易くなったようです。

評価を行う際、何を持って評価するかという基準が確立していないため、最も分かりやすい入館者数の多少（入館料収入の多少）のみが評価基準となっている感があります。博物館運営に携わったことのない人々が評価するのですから入館者数しか見えないのも無理ないかも知れません。大阪府では、入館者の少ない館を統廃合する計画が進んでいます。和

歌山県でも総事業費を入館者数で割って、1人を入館させるために必要な経費を算出して、県立博物館施設に序列を付けたことがあります。どれだけ素晴らしい研究や展示をしても入館者がなければ何の価値もありますが、入館者数のみで評価されるのもうなずけません。このため、各館の学芸員は、入館者の増加を図ろうと人々に興味を持ってもらえるような展覧会・研究講座・体験教室・史跡探訪会・採集会等を開催し、自己の専門分野の研究をする暇もないほど忙しくなっていました。

そこで、今評価される側の博物館が考える評価基準を早急に検討する必要があると考えます。もちろん誰にでも分かるような平易なものである必要があります。共通の分かり易い評価基準ができれば、もっと博物館事業に対する一般の理解が深まるのではないかと思います。



体験教室「曲玉を作ろう」



特別陳列「御坊の獅子頭」展

広島博物館事情 広島城の今

広島城 館長

石田 彰 紀（いしだ あきのり）

80期史



毛利輝元によって築かれた初代の広島城天守閣は、昭和20年8月6日の原子爆弾による凄まじい爆風に耐えられず、大音響とともに倒壊しました。

現在の天守閣は、昭和33年に開催された広島復興大博覧会のシンボルとして再建されたものです。幸い、倒壊前の天守閣は国宝に指定されていたため正確な図面が文化庁に残されており、これを基に鉄筋コンクリートでの外観復元が実現したのです。そしてこの復元建物は博覧会の第三会場、広島の歴史と風土、自然を学ぶことのできる「郷土館」として利用され、博覧会終了後も「広島城郷土館」の名称で市民や観光客に親しまれてきました。その後昭和58年に、「広島市博物館群構想」が打ち出され、その中で広島城郷土館は、武家文化を中心に明治維新までの広島の歴史を扱う歴史博物館として位置付けられました。この計画に沿って、毛利輝元が広島城を築城してから四百年目に当たる平成元年に「広島城」の名称でリニューアルオープンし、平成19年6月18日には念願の登録博物館となったのです。

さて広島市では平成18年度から非公募の「指定管理者制度」を導入し、従来から管理運営を受託していた財団法人広島市文化財団（広島城）を指定管理者としました。指定に当たっての主な条件は、一期四年間、利用料金制の採用、目標年間入館者数15万人、年間指定管理料約5千万円、利用料金収入約3千4百万円、職員数8人等で、目標数値が達成されない場合、次期は公募もありうるということで、職員には相当な危機感やプレッシャーの源となっていました。こうした中、職員提案による開館時間の延長や出張講座の実施、平和学習の拠点化、「砂持加勢まつり」や「シンポジウム」などの様々な広島城再建50周年記念事業の展開、広島城に関わる広島の歴史や文化の研究を「広島城学」と銘打ちその成果を発信するなど、新機軸の事業を矢継ぎ早に打ち出してきました。

このような職員の頑張りは、「広島城」の存在を広島市民や県内外の多くの人々に浸透させる狙いどおりの結果となり、入館者の大幅増にもつながったのです。指定管理一年目の入館者は目標数値の15万人に及ばなかったものの、二年目は161,188人、三年目は186,235人というのがその結果です。広島城

のこれらの動きは平成20年11月24日付の中国新聞社説において『再建広島城50年 歴史を取り戻す拠点に』のタイトルで極めて好意的に論評されました。

私が広島城館長として着任したのは平成20年4月のことです。職員8人の内、学芸員資格を持つのは私を含め7人。幸い部下は全て旧知の職員ばかりで、その中には院友の篠原達也君（99期史）もいます。当館では日常的に入館者からアンケートを取っていますが、その中で最も多かった意見は「暑い、寒い」で、これは空調機と自動ドアの導入で解消できました（副次的な効果として、外部からの砂ぼこりの侵入の軽減があります）。そして次に多い意見である「館内が暗い」については、LED照明化も含め改善を進めています。学芸員が分担しながらこうした多くの施設改善・環境整備が推進できるのも、職員の頑張り→入館者の増→利用料金収入の増→自主財源の確保、の結果です。現在の戦国ブーム、城郭ブームがいつまでも続くはずはなく、入館者の要望に沿ったこれらの環境整備は、今後のリピーター確保に向けての投資と私は職員に説明しています。

終わりに、博物館を取り巻く環境は決して明るいものではありませんが、これから学芸員を目指す学生の皆さんに期待したいこととして、広島城のような小規模な博物館にあっては、学芸員が学芸部門の業務に専念する余裕はなく、お客さま本位を念頭に館の運営に関与する多彩な能力が求められていることをお伝えしておきます。



砂持加勢まつりの様子

地域博物館として生きる

平塚市博物館 館長

明石 新 (あかし あらた)

82期史



昭和51年に開館した平塚市博物館は今年で33年目を迎えました。この間、平塚市博物館条例第2条に掲げられた「相模川流域の自然と文化」に関する資料の収集・保管・展示・研究等を実施してきました。そして、日々の活動から育ててきたのが「地域博物館」としての生き方です。

相模川下流域の右岸に位置し、相模湾に面する平塚市は、さまざまな地形が発達しています。この多様な自然環境や、そのなかで育まれてきた多様な文化は、行政区域だけでは決して解明されるものではありません。そのために、生活域を重視した総合博物館として、相模川流域にフィールドを設定し、「自然と文化」をテーマとする複合的な展示や事業活動を展開してきましたが、その現状は未だ途上段階にあると考えています。

開館した時点での資料はほとんど無く、ゼロからのスタートと言って過言ではありませんでした。そのため、各分野の学芸員は調査に明け暮れた時代だったと感じています。当然ながら担当者一人で事業をこなすには広範囲にわたることから、市民と共にさまざまな活動を実施してきました。その成果が調査報告書や常設展示、特別展のなかで活かされています。また、行政側にも地域情報を提供してきたことで、高く評価されています。

このように「地域博物館」としての活動や、地域情報の発信・提供は、博物館事業の根幹をなすもので、その成果の一部として常設展示の展示替えがあります。平塚市博物館では、過去5回の展示替えを定期的に行っています。来館者に、常に新しい情報に基づいた展示を提供することによって、何度も足を運んでもらうことが大切と考えます。当館では、前述したように市民と一緒に活動し、その成果をレポートや特別展のなかで形にしてきました。その特別展は、限られた期間の来館者の目に触れるだけですが、常設展は日々、大勢の方々と向き合い対話することができる「博物館の顔」であり、最も重要な場所と考えています。

この「博物館の顔」を最大限に活かすには、新しい地域情報や活動成果を反映させた展示替えが最大の役割を果たすものと考えます。文化・情報の発信基地としての博物館が「いつ来ても同じ顔」では、市民力や地域力を育て高めることはできません。展示替えをすることによって、新たな来館者を掘り起こし、地域の自然と文化を学ぶ喜びや活気を生み出すことができます。また、地域文化の掘り起こしや

再発見にもつながります

博物館は収集した資料・情報をどのような方法で発信し、どのような成果を出すかが大切です。そのためには、博物館事業に参加する市民に事業の目的を伝え、一人でも多くの理解者・協力者を育てることから始めなくてはなりません。次に、その集団・組織を作り、目的とする課題にみんなで取り組み解決していくことが重要です。そして、その成果が結実する場が常設展示と考えます。焦らずに一步一步進める過程が大切ではないかと考えています。また、そのなかで、まず自分自身が楽しむことが大切だと感じています。



土器づくりの様子



シンポジウムの様子

神社博物館の学芸員

久能山東照宮博物館学芸員

齋藤 曜 (さいとう よう)

109期神・111期博前神



私の奉職する久能山東照宮博物館は、御祭神徳川家康公を祀る東照宮に付属する博物館です。収蔵する資料は、東照宮伝世の宝物を中心に総数二千点を数え、収蔵資料の特色を一言で表しますと「徳川歴代將軍の武器・武具の充実」となります。中でも御祭神家康公の枕刀三池典太と、太刀真恒は収蔵刀剣の双璧をなす名刀です。加えて甲冑は、家康公の齒朶具足・金陀美具足・白檀塗具足をはじめ、徳川歴代將軍の召料はもれなくそろい、江戸時代の武具研究に不可欠な資料群を有すると自負しております。



金陀美具足

これらの貴重な宝物資料を収蔵する神社付属博物館の目的は、本誌の第二号で出雲大社千家和比古権宮司より「神社に附設された博物館の目的意図は、申すまでもなく先ずは神社・御祭神の理解を求め深めるところにあります」と御教示いただいております。まさしく千家権宮司の御教示通り、当館の事業目的も「神社の目的達成に資すると共に広く国民の教育学術及び文化の発展に寄与するため」と明文化されております。宝物資料を活用し参拝者・来館者に対する神社理解、さらには神道教化へ貢献できれば神社博物館はその在り方を示せるのではないのでしょうか。

そして宝物資料の活用と同時に、神社博物館に奉職する学芸員は宝物資料を無事に後世に引き継がなければなりません。一人の学芸員が奉職できる期間は三十年程の限られた短い期間です。対する宝物資料は永い歴史を有する文化財。歴史ある宝物資料をいかに良い状態で後世に伝えていくかが神社博物館の使命と命題ではないのでしょうか。神社博物館に奉職する学芸員は、わずかな時間、一時的に宝物資料の管理を委ねられただけにすぎません。

御祭神家康公は関が原合戦後、各地の大名に対して改易（取り潰し）と転封（移転）により、大名たちの領主私有化を厳しく禁じたとされています。一例として、備前国岡山藩の藩主池田光政は「上様（將軍）は日本国中の人民を天より預かり成され候、国主は一国の人民を上様より預かり奉る」（『池田光政日記』）と述べ、伊勢国津藩の法令には「我等は当分の国主、田畑は公儀の物に候」（『宗国史』）とあり、対馬藩の藩主宗義方は幕府にあてて「藩屏兵馬の備は私一分之事にても無之、天下に相預かり候保国之至要にて御座候」（一七一四年書付）と述べています。領主は交代するもの、対する土地や民は末永く守られるとの表れです。

神社博物館の学芸員も僅か一時期、宝物資料の管理を預かるだけの身です。責任を持って後世に宝物資料を引き継ぐことに職務を賭けても良いのではないのでしょうか。



久能山東照宮博物館

学芸員を志す皆さんへ ～多様性に富んだ学芸員となれ～

(財)網走監獄保存財団 博物館網走監獄学芸員

今野 久代 (こんの ひさよ)

95期文



私の勤務する博物館網走監獄は、日本で最も有名な刑務所、網走刑務所の明治期に建てられた建造物を移築復原し、行刑資料とともに監獄が明治の黎明期、北海道開拓に果たした事績などを伝える野外歴史博物館です。

開館から25年で1千万人を超える方々に来館頂きましたが、バブル経済の終焉とともに、博物館を取り巻く環境も厳しい現実と直面しています。そうすると資料の購入、修理予算や人件費は減る一方です。このような動きは、程度の差こそあれ全国的な流れで進められていると思います。だからといって、嘆いてばかりもいられません。どうしたら活気あふれるミュージアムに地域に必要とされる博物館として存続できるのか、頭を悩ませています。そこで、こんな厳しい中、学芸員を志す院友の皆様へ、私の勤務経験から考える学芸員に必要なことについて述べさせて頂きます。

学芸員は私一人だけという状態で勤務した当時は、右も左も解らないまま、暗中模索の状態で日々の業務をただこなすことで精一杯でした。大学で専攻した分野の学芸員として勤務できるのなら良いのですが、私のように建築、行刑史と専門外の学芸員として勤務した場合、仕事内容は知らないことからのスタートです。学芸員の仕事は資料とだけ向き合っていればいいのではなく、資料を通じて人と物を結びつけていく、即ち市民や地域と自身の博物館が関わっていくことです。資料の収集から調査、展示、教育普及活動にいたる全ての過程において、その街に住んでいる人の協力なくしては何もできないということを19年間学芸員として勤務し実感しているところです。何も知らない私に、たくさんの方が親切にご教示してくださいました。人に教わるということは一生続くのだということを、この仕事について学びました。

資料の存在した地域の人々との交流があって、資料の持つ歴史的背景が浮き彫りになり収集活動も広がります。とにかくアンテナを張り巡らせ貪欲に

学ぶことで、専門外のことで時が解決してくれます。専門性は自身によって後からでも習得できると知って頂きたいと思います。

しかし、人に感動を与え、この博物館に来て良かったと思ってもらうことは一番難しいことだと痛感しています。

よく雑芸員だなどと卑下した言い方をされる方がいますが、私は雑芸員で結構と思っています。当館のように地方にある館は、専門以外の民俗資料の寄贈を多数受けます。収蔵庫は満杯ですが、あの博物館に持っていこう、あの学芸員に預けようと考え持参してくださる方にとっては、どれも宝物なのです。民俗、考古、美術と様々な資料と真摯に向き合うことは大変なことです。地域のあらゆる事象に対して真剣に取り組む、その経験の積み重ね、即ち多様性がとても重要なことです。院友の皆様、初めから理想通りの仕事ばかりではないと思いますが、どんな経験も無駄ではなく、貴方自身の幅を広げてくれます。逆風が吹いている時代だから、多様性に富んだ学芸員が求められていると思います。多様性とは、何にも変化しうること、多くのニーズに応えられるということです。感動を与え、この博物館にまた来たいと思われる博物館づくり、ファンづくりが学芸員にとって最も大切なことだと思うのです。



友の会会員への特別展示解説

新米院友学芸員より —後輩のみなさんへ—

北区飛鳥山博物館学芸員

平 澤 佑加子 (ひらさわ ゆかこ)

115期史・117期博前史



桜の名所である王子・飛鳥山に場所を構え、北区民や近隣地域の皆さんの憩いの場として親しまれている北区飛鳥山博物館、2009年4月より私はこの博物館で新米学芸員として一步を踏み出しました！

もとはというと、私は学部時代に東洋史を専攻していました。そして学問を深めるために中国天津に短期留学をしたのですが、その時に見た中国の一地方都市の文化財の現状……。急激な発展を遂げる一方で、開発の名の下取り壊されていく数々の遺跡や遺物を見たことにより、「モノを守る」ということについて深く考えさせられ、「博物館」についてもっと学びたいと思い、博物館学で大学院進学することになったのです。

博物館学研究室では、頼れる先輩に出会い、信頼できる同期などにも恵まれ、何にもまして青木先生の優しくも厳しいご指導があって、モノを守るとは何か、博物館とは何かを環境的に学べました。そして

学芸員になって、地域の歴史がこもったモノを守っていききたいと、自然な流れでそう思うようになっていきました。

私がどのように学芸員就職を果たしたかといいますと、とにかく、がむしゃらの一言。すべてを駆使して募集情報をかき集め、あらゆる博物館に書類を送り続けました。そして縁があって北区飛鳥山博物館に就職することができました。

残念なことです。現在博物館学での募集は本当に少なく、経費の関係から新人を雇うよりも学芸員経験者のほうを雇うのが現状です。しかし博物館学的な考え方を持つことで、職場の現状をもちろん把握した上で、プラスアルファの考え方が出来ます。博物館学研究室の日々は私にそうした信念を与えてくれたので、心折れずに就職活動することが出来たのです。後輩の皆さんには是非自信を持って、博物館学研究室で学んでほしいと考えています。

鳥取に来てからのこと

鳥取市歴史民俗博物館学芸員

石 井 伸 宏 (いしい のぶひろ)

113期史・115期博前史・118期博後史満期退学



私は、今年の6月から鳥取市歴史博物館の嘱託職員として採用され、鳥取に引っ越して来ました。鳥取市歴史博物館は平成12年に設立された鳥取市文化財団が運営する博物館で、鳥取市の歴史を中心に展示を行っています。近年は鳥取市域だけではなく「因幡国」全体を視野に入れた研究や展示活動なども行っています。

私がここで働くことになったのは、鳥取市歴史博物館で中世史を中心に勉強している人という条件の募集があり、青木先生から指導教授である千々和到先生を通じて、この募集を教えて頂いたのがきっかけです。私には鳥取に知人や親族などは一切無く、また大学院での研究は鳥取とはほぼ無縁でした。そう言った者が鳥取で学芸員をやっているのかは考えたのですが、これが歴史で就職が出来る最後のチャンスだと思い、思い切って応募したところ、何とか採用される事になりました。

鳥取の中世史に関しては、一部の研究者以外、あまり行われてきま

せんでした。しかし、逆に私にとっては非常に運が良く、鳥取に来てすぐに展示する中世文書の解説を書かせて貰ったり、次年度には、因幡地方に関わる中世文書の調査などを調査計画に入れて貰ったりと、専攻を活かせる仕事をやらせて貰っております。

しかし、中世に関わる事を事業に入れてもらう以上、その責任も感じております。また学芸員として仕事をする上で経験や知識不足と感ずることが多く、毎日が勉強の場です。しかし、新たな技術や知識が身につく、充実した毎日を送っていると思います。

私自身が勉強不足ですので、役に立つコメントは言えませんが、仕事に就いて思うのは、自分には何が出来るのかを考える事が重要なのだと実感しました。当然試験を通過するための知識は必要ですが、最終的には、自分なりに、学芸員としてどのようなビジョンを築いていくのか、学生の時から考えていく必要があるのだと思います。

学芸員への道程 —郷土史料館に勤めて—

伊豆の国市韮山郷土史料館

政木 愛子 (まさき あいこ)

114期神



大学卒業後、三島市郷土資料館に嘱託学芸員として3年間、そして今年5月から伊豆の国市韮山郷土史料館に非常勤職員として勤務し学芸の仕事をしています。

私は、地域における様々な活動に興味があり、また大学では博物館課程を履修していたため、在学中に、三島市にある三嶋暦師の館や佐野美術館でボランティアをしていました。ボランティアでは、施設案内や展示説明、イベントの企画運営など様々なことをさせていただきました。活動をする中で、学芸員の方々にお世話になり、また一緒に活動する多くのボランティア仲間とも出会うことができ様々なことを学びました。

このような活動を通して、三島市郷土資料館で働かせていただくことが決まりました。今年から勤務している伊豆の国市韮山郷土史料館

についても、三島市郷土資料館でお世話になっていた職員の方や先生方から紹介していただいたものです。

また青木先生には、卒業後も、小山町の富士山東口本宮富士浅間神社の資料館を紹介していただきました。学芸員の仕事と共に、専門である神職としても折に触れお手伝いをする機会を得ることができました。学芸員として専門分野を持つことは必要だと思います。しかし、勤務先の史料館では、歴史や美術、民俗などあらゆる分野の知識が必要となり、幅広い勉強の積み重ねです。また、地方の史料館の役割として、文化や伝統を守っていくために、地域の方々に興味を持っていただけるような生涯学習活動の機会をつくる必要性を感じています。

たくさんの方々に支えられ多くのことを学び、今後も、伝統・文化を守り伝えていく一助になりたいと思っています。

学芸員を目指す皆さまへ —一言のアドバイス—

埼玉県立歴史と民俗の博物館学芸員

藤崎 温美 (ふじさき はるみ)

115期文・118期博前史



私は、青木豊教授のご紹介により、平成20年の8月から埼玉県立歴史と民俗の博物館で、産休に入られた方の代わりに臨時職員として勤務しております。経験の少ない若輩者ではございますが、後輩の皆様へ申し上げるとするならば、「何事も楽しみながら仕事をする」という前向きな姿勢を持つことが大切であるということです。一見、簡単なことのようにですが、実際は中々難しいものだと思います。

私が所属している資料調査担当の業務は、主に収蔵資料に関する調査研究、収蔵庫内環境の管理、資料の収集・整理・保存、館外貸出といった「縁の下の力持ち」的要素の強いものです。

当館では、収蔵資料に対する生物被害を未然に防ぐため、月に2回の収蔵資料または収蔵庫内の定期清掃を行っています。こういった作業は、資料を文化財害虫から守り、後世に伝え、永く公開していくためには欠かすことができません。しかし、これが何とも地道で根気のいる作業です。

同様の作業をしていただいた学芸員実習の学生さんからは、「学芸員がこんなに地味で疲れることをしているなんて」といった感想が多く聞かれるほどです。

しかし、そのような作業であったとしても、ただ淡々とこなすのではなく、小さなことでも構わないので自分なりの楽しみや目標を持つて行くと、「発見」や「驚き」が見つかることがあります。これは、例えば、仕事内容が雑務であったとしても、当てはまることだと思います。

諸先輩方がおっしゃるように、学芸員は日々、雑務に追われがちです。しかし、そういった中でも楽しみや目標を見つけ出す前向きな姿勢で臨むことで、発見や驚きとの出会いもありますし、仕事に対するモチベーションもあがってくるのではないのでしょうか。

私も常にそのことを念頭に置き、今後もたくさんの小さな発見と驚きとの出会いを重ねてゆきたいと思っています。

羽村の学芸員として

羽村市郷土博物館学芸員

安 藤 華 子 (あんど う はなこ)

117期史

羽村市は東京の西多摩地区、多摩川中流域に位置し、江戸の人々の生活を支えた玉川上水の取水堰があり、風光明媚な景観が広がっているところ。そして郷土博物館はその堰の対岸にたっており、玉川上水と養蚕、長編小説『大菩薩峠』の作者中里介山の展示に重きをおいています。

そして当館は郷土博物館という性格上、収蔵資料約7万点の大部分を地域からの寄贈資料が占め、新たに収蔵される資料も地域の方々のご好意で寄贈されたものがほとんどです。博物館としては収蔵資料が増えるのは喜ばしいことですが、その一方で収蔵庫に入りきらなかったり、死蔵になってしまうという大きな問題も抱えています。現在その改善方法を模索中ですが、それは学芸員の意識改革はもちろん、地域の理解も必要なのではないかと思います。「博物館は古いものがたくさん置いてあるところ」から「羽村の歴史を伝え、ふるさとの関する新たな発見が得られる場」へ。今後その理解を促し、館と資料の活用方法を考えていくのは私たち学芸員の役目ですが、それができるとき、本当の意味での「羽村市郷土博物館」となれるのではないかと思います。



しかし、まだ学芸員となって1年にも満たない若輩の身。今後も先生方、諸先輩方のご指導を仰ぎながら、年限の許す限り羽村に親しまれる博物館づくりに邁進していければと願っております。



旧下田家住宅（国指定重要有形民俗文化財）

学芸員への道程 —夢の道へ—

刀剣博物館（財団法人日本美術刀剣保存協会調査課）学芸員

井 本 悠 紀 (いもと ゆうき)

117期史

財団法人日本美術刀剣保存協会調査課学芸員の井本です。2009年3月に國學院大学文学部史学科を卒業し、同年4月から勤務しています。まだ数ヶ月しか学芸員経験がない私ですが、これから学芸員を目指す皆様の一助となればと思い書かせていただきます。

私は、大学入学時から文化財に関わる仕事がしたいという気持ちを強く持っていたので、周りが一般企業への就職活動を始める時期になっても、主な就活をせずに時間の許す限り博物館・美術館に行ったりしていました。友人たちの就職が決まってく中で、不安も感じましたが希望する職業に就くためには我慢の時期だと思っていました。では、どのようにして現在の職場へ採用が決まったかですが、私は刀剣保存協会のみに焦点を絞って4年の夏前から本格的に就職活動を始めました。駄目もとでしたが、募集が出る前から電話をしてみたり、直接伺って話をさせていただいたり、何でもする勢いで自分を売り

込んで行きました。

最初は断られていたのですが、秋頃になって募集をかけることを知り、それからは青木先生に相談をし、推薦状を書いていただき面接へと進めました。

どの職種でも同じだと思いますが、希望する仕事に就くまでには我慢強くなるのが重要だと思います。特に、学芸員の募集はいつ出るかわからず、私の採用が決まったのも年を越した1月でした。面接を受けてから採用が決まるまでの数ヶ月は苦しい時期でしたが、人生において我慢して待つことの意味を教えられた気がします。そのお陰で現在、毎日やりがいを持って仕事が出来ているのだと思います。これから学芸員を目指す皆様も我慢しなければならない時期があると思いますが、そこで諦めることをせずに希望する道を目指してもらえたらと思います。些末な文章ですが、皆様の一助になれば幸いです。



平成22年度 大学院講座表

科目名	単位	曜日	時限	時期	備考
論文指導演習	4	月・火	4・5	通年	
資料保存展示論研究・特殊研究	4	月	6	通年	
地域博物館論研究・特殊研究	4	火	6	通年	
博物館史特論	2	木	5	後期	
博物館学史特論	2	月	7	前期	
欧米博物館史特論	2	水	2	前期	外書講読
博物館関係法規特論	2	土	2	前期	
博物館資料論特論AⅠ(金工)	2	金	3	後期	
博物館資料論特論AⅡ(有職)	2	金	2	前期	
博物館資料論特論BⅠ(民俗)	2	火	3	前期	
博物館資料論特論BⅡ(絵画)	2	土	2	後期	
博物館経営特論	2	金	6	後期	
博物館教育活動特論	2	木	5	前期	
展示工学特論	2	金	7	前期	
博物館学専門実習・特殊実習	4	木	6	通年	(前) 学術資料館等でのインターンシップ1単位、夏期集中授業学外実習1単位を含む (後) 夏期集中授業・国内外インターンシップ各1単位を含む

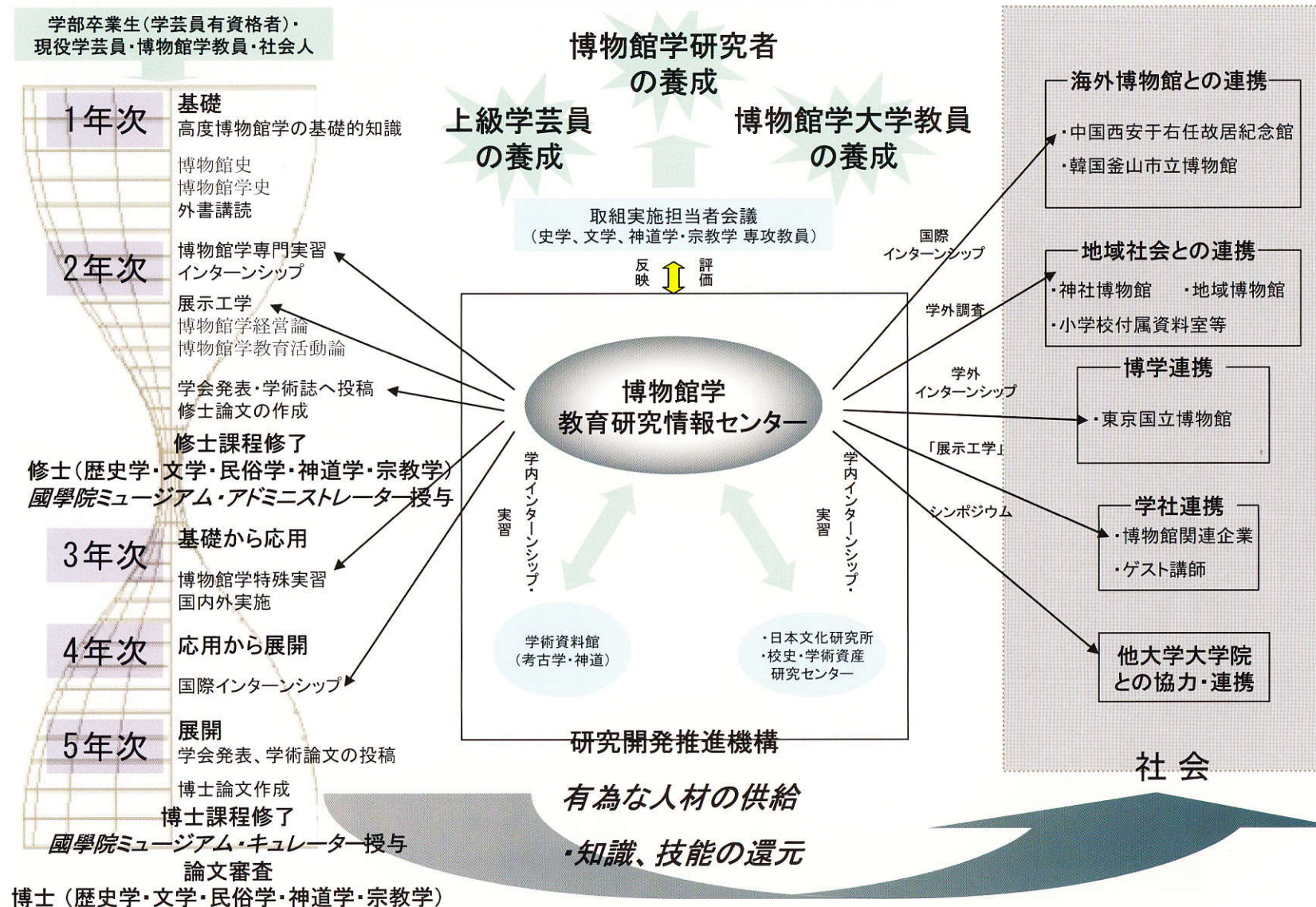
平成22年度 國學院大學博物館学教員紹介

大学院担当教員	青木豊(國學院大學) 資料保存展示論研究・特殊研究 博物館学史特論 博物館概論 博物館資料論Ⅰ・Ⅲ 他	落合知子(國學院大學) 地域博物館論研究・特殊研究 博物館学専門実習・特殊実習 博物館実習Ⅲ・Ⅳ	小川直之(國學院大學) 博物館資料論特論BⅠ(民俗)	鷹野光行 お茶の水女子大学 教授 博物館史特論
	矢島國雄 明治大学 教授 欧米博物館史特論	池田宏 東京国立博物館 上席研究員 博物館資料論特論AⅡ(有職)	原田一敏 東京芸術大学 教授 博物館資料論特論AⅠ(金工) 博物館実習Ⅳ	岩崎均史 たばこと塩の博物館 主任学芸員 博物館資料論特論BⅡ(絵画)
	井上洋一 東京国立博物館 事業企画課長 博物館経営特論	栗原祐司 文化庁文化財部 美術学芸課長 博物館関係法規特論	駒見和夫 和洋女子大学 教授 博物館教育活動特論	石川貴敏 (株)丹青研究所 文化空間情報開発研究部 部長 展示工学特論
学部担当教員	内川隆志(國學院大學) 博物館実習Ⅰ	高橋信裕 文化環境研究所 所長 社会視聴覚教育Ⅱ	樋口政則 江戸川区郷土資料室 学芸員 博物館実習Ⅱ	山田磯夫 横浜美術大学 准教授 博物館資料論Ⅱ
	杉山正司 埼玉県立歴史と民俗の博物館 学芸主幹 博物館経営論	有元修一 目白大学 教授 博物館実習Ⅳ	石田武久 儀礼文化学会事務局長 博物館実習Ⅰ・Ⅳ 博物館概論	桒淵規彰 教育委員会文化遺産課副主幹 博物館資料論Ⅱ 博物館実習Ⅳ
	粕谷崇 白根記念渋谷区郷土博物館・文学館 学芸員 博物館情報論	下湯直樹(國學院大學) 博物館学研究室 助手 博物館実習Ⅲ	伊藤慎二(國學院大學) 博物館学教育研究情報センター 助教	

※大学院授業、大学授業

高度博物館学教育プログラム

—体系的な知識と技能を備えた博物館学研究者と上級学芸員の養成—



國學院大學

院友学芸員 No.3

平成22年3月31日

発行日

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大學博物館学研究室

Tel&Fax 03-5466-0268(直通)